東北工業大学地域連携センター・研究支援センター紀要 EOS
Vol.35 No.1 p.71 ～ p.76, 2023

令和３年度学内公募研究（地域連携型）
〔研究論文〕

気仙大工左官伝承館の職人道具アーカイブ研究

中村　琢巳 [1)]

Archival research on traditional craftsmen's tools stored by The Kesen Carpentry and Folklore Museum

Takumi NAKAMURA [1)]

Abstract

I worked on archival research on traditional craftsmen's tools stored by The Kesen Carpentry and Folklore Museum in Rikuzentakata. By making a database of more than 1,000 materials such as carpentry and plasterer, I aimed to consider the relationship between Kesen carpentry traditional techniques and characteristics of the tools. In addition, I aimed to propose a more academic display method based on the value evaluation of the tools.

1　研究プロジェクトの背景と目的

本プロジェクトは，岩手県陸前高田市小友町に所在する「気仙大工左官伝承館」（1992年７月開館）が収蔵する建築職人の伝統的な道具に関するアーカイブ研究である。気仙地方の杣木挽や大工，左官といった建築職人から東日本大震災前に収集された数千点に及ぶと目される道具の整理，目録化，評価による学術的データベースを構築し，当地独特な意匠的作風を誇る職人集団「気仙大工」をうみだした生産技術史の分析を目指すものである。構築した道具データベースは建築史・技術史の学術的基盤としてだけでなく，これら職人道具の歴史的価値の評価，さらに今後の博物館における展示デザイン提案にもつなげることも本プロジェクトの長期的な目標としている。

2021年度は，この研究プロジェクトの立ち上げ段階として，現状の道具類のデータベース化から着手した。収蔵される道具の多量さもあって，本プロジェクトは2022年度以降も継続して実施している。本稿では，本プロジェクトの背景，目的と具体的な狙いについて示すとともに，2021年度の活動状況について報告する。

本プロジェクトの背景として，博物館収蔵品の調査とともに，長期的には，陸前高田で進行している歴史・文化を活かした復興事業との関係も視野に入れている。具体的には，

１）東北工業大学　建築学部　建築学科　准教授
Associate Professor, Department of Architecture, Tohoku Institute of Technology

東日本大震災の津波で流失した江戸時代の民家である岩手県指定文化財・旧吉田家住宅を，造成敷地（当初地）にレスキューされた古材を再組立てし，地域博物館として完成が目指されている文化財復旧との連携である。この事業は地域の大工集団「気仙大工」の技術伝承をも目的とし，復興事業のなかでも地域伝統文化の振興とも連携する特色をそなえる。

職人道具アーカイブという本プロジェクトは，有形文化財の民家（旧吉田家住宅）の復旧，気仙大工の伝統技術の継承という意義を，より向上される狙いもある。すなわち，陸前高田市が所有する伝統建築紹介施設「気仙大工左官伝承館」に収蔵される職人道具の価値を明らかとし，またその価値を踏まえた展示提案を目指すことで，文化財建造物と伝統技術，それを生み出す道具という，重層的な地域文化財の世界を示すことができると考えている。

写真１　土蔵風の資料庫の外観

写真２　気仙大工技術により再現された母屋

写真３　資料庫１階の展示状況

写真４　資料庫２階の展示状況

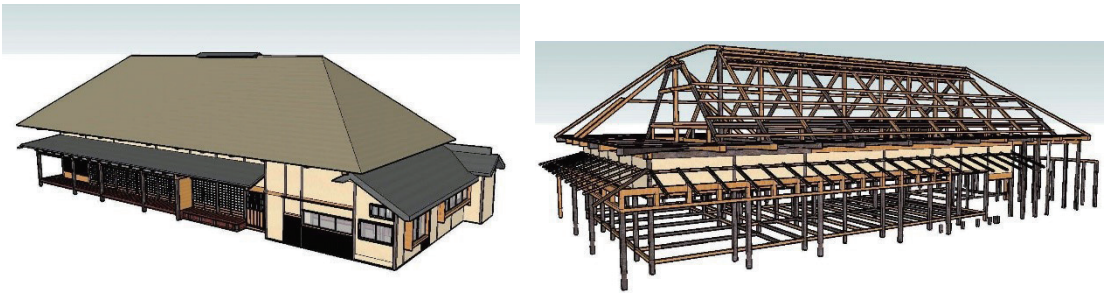

図１　岩手県指定文化財旧吉田家住宅外観と架構３Ｄイメージ（東北工業大学中村琢巳研究室制作）

２　2021 年度の活動状況

2021 年度の実施内容は，収蔵品のデータベースの現状確認から着手した。東日本大震災により，気仙大工左官伝承館を建設した経緯や展示計画・収蔵品収集の経緯を物語る体系的な資料類は残存していなかった。そこで，被災を免れた気仙大工左官伝承館事務室に残る建設・収集の経緯を示す書類を確認した。手書きで写真を張り付けた道具収集台帳やファイリングから，気仙地方の建築職人から収集した道具類の概要が追跡できることが判明した。その台帳より，道具の使用者・居所・生年といった基本情報をデータ入力し，気仙大工左官伝承館の道具収集活動をデータベース化していき，かつ現状の収蔵・展示品と照合する作業とした。

気仙大工左官伝承館で「公開展示」されている道具類の展示方法を含めた現状把握も行った。悉皆的に現状の展示品を目視確認していき，その職人道具の種別や特徴をリストアップしていった。この作業と同時に，展示構成や展示品・解説キャプションとの対応関係を確認し，展示デザインの提案につながる情報を検討している。

また，気仙大工左官伝承館には展示公開されずに保管されている道具類も多数存在した。そのため，保管箱に収納された道具類の確認，データ入力も行った。

写真５　箱に収納された千点に及ぶ平鉋

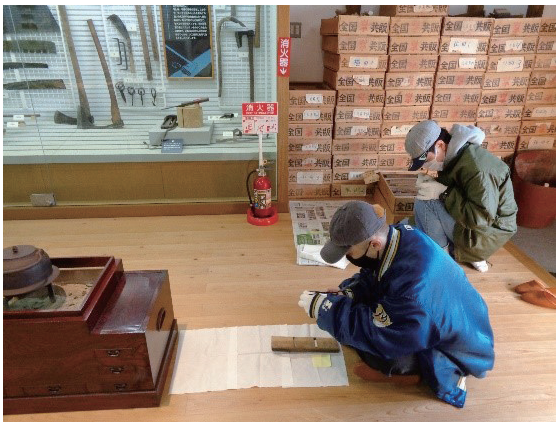

写真６　平鉋の撮影および採寸作業

３　収蔵品の概要

気仙大工左官伝承館は管理棟兼用の資料館，母屋，資料庫からなる施設である。このうち，職人道具が展示・収蔵されるのは資料館の展示ホールおよび資料庫１階・２階の三つのゾーンである。各ゾーンにおける展示・収蔵品の概要を以下で示す。

エントランスにあたる資料館では，普門寺三重塔などの気仙大工ゆかりの歴史的建造物の模型，木組みや樹種模型など，職人道具以外の展示品も含めて，気仙大工の歴史や技術，現存する作品などが展示パネル（写真，年表）とあわせて紹介されている。

職人道具については，鋸，鉋，墨壺，鏝が展示される。大量に平鉋を収蔵する資料庫とことなり，この展示ホールでは，壁面展示として，平鉋以外の鉋がとくに集められていた。たとえば長台鉋，外丸鉋，反台鉋，決り鉋，脇取鉋，際鉋，台直し鉋などであり，平鉋もあわせて，鉋で約 40 点が並ぶほか，墨壺と墨指，左官鏝，鋸（両刃鋸および胴付鋸）が展示される。

道具の展示方法はキャプションがなく，鉋の分類名や使い方などは紹介されていない。しかしながら，旧所有者名（職人名）とその居所，その職人の生年が記載されている点が大きな特徴である。道具展示でありながら，このような情報が，地域史を伝える可能性をもつからである。キャプション等で，この職人情報（居所・生年）を効果的に伝えることで，ユニークな道具展示を実現できることが予想される。

次いで，資料庫１階の状況をみていく。入口付近に，平鉋が収蔵された箱が仮置きされる。この箱には，収納する鉋の職人が居所とした町名が示されて，道具分類ではなく，地域で分類されている点が特徴である。先述した資料館ホールの壁面展示と同じく，こうした地域別の収納ないし展示公開の利点を活用し，千件を超える量もあって，地域史を物語る道具展示という可能性を有するものである。この鉋は千点を超える数量が予想されるが，その集計，データベース作成作業は 2022 年度以降も取り組んでいる。

資料庫１階の中央には前挽大鋸の露出展示とともに，気仙大工ゆかりの歴史資料が展示されている。職人道具にとどまらず，多くの大工関係の歴史資料（図面や帳簿，儀式帳，旅日記などその内容は多岐にわたる）を収蔵する点も，この気仙大工左官伝承館の特徴で

写真７　壁面展示例

写真８　職人名や居所、生年の情報と道具展示

ある。気仙大工の技術史の視点にとどまらず，旅日記等の職人生活史的研究も可能であり，この歴史資料の分類や解読，研究，展示公開方法も今後の課題である。３面の展示ケースには，建築をつくる道具の作業工程ごとに職人道具が分類されて，展示される。すなわち，伐木製材関係（斧や前挽大鋸），鋸，鑿，鉋，砥石，墨壺，左官鏝といった展示構成である。鑿や鉋は，多種多様な道具を展示している一方で，展示パネルやキャプションでの道具説明が少なく，大工等の専門家でないと，展示された道具の用途や使い方や理解しにくいかもしれない。

資料庫２階は，大工職人以外の道具が集約されている。左官鏝や前挽大鋸，斧などの道具類が積み重ねられる。左官や杣木挽といった当地域で活動した大工以外の職人の足跡も，これら道具類からみることができる。

４　おわりに

2021年度はデータベース化も着手時期であり，気仙大工左官伝承館が収蔵する多量の職人道具の網羅的なデータベース化にはまだいたっていない。それでも，基本台帳の確認，展示状況および保管道具のデータベース化の作業を通して，本博物館が収蔵する職人道具の特色・価値についてもいくつかの視点が見いだせた。たとえば，台鉋に「千代鶴」といった全国的に著名な鍛冶銘の刻印があるものが散見される一方で，むしろ収集台帳の存在から，大工道具の旧所有者の生年や居所といった情報が追跡できる点が特徴ともいえる。つまり，道具自体の貴重性や優秀さよりむしろ，気仙地方の職人という「地域史」の観点からの評価が有効だと考えられる。鉋のデータベースを，鍛冶銘に加えて，所有者の生年や居所などで統計分析することが，今後必要な作業だと考えている。一方，鏝等の左官道具については，気仙左官の精緻な技術に対応するような非常に幅広い種別の道具が収蔵されており，左官道具については道具自体の希少性が見いだせる可能性もあろう。

大工道具の分析から気仙大工の作風を生みだした生産技術史を読み解く可能性，すなわち日本建築史研究への展開も今後の課題である。周知のとおり，寺院・神社の奇抜なデザインを民家にも応用する作風をもつ「気仙大工」については，長年にわたる歴史的建造物調査の優れた研究成果がある。しかしながら，そうした奇抜なデザインを生みだした地域史・生産技術史の背景として，大工道具の評価については，既往研究では着目されることは少ない。

2021年度の展示品・収蔵品の網羅的な観察によって，気仙大工の道具揃えは，繊細な仕上げ系鉋を多量に持つなど，奇抜な建築デザインの作風に関わる特色が見いだせることを予想している。こうした大工道具，伝統技術，建築を一体的に評価・分析する研究は，日本建築史研究のなかでも未開拓のテーマでもあり，今後も研究を継続したい。展示公開の手法面からみても，道具展示のそばに気仙大工の作風を再現した「母屋」が隣接する好状況があり，技術と道具の関係性を紹介する視点が打ち出せれば，博物館としても有効だろう。

また展示状況を確認することで，展示計画の改善点についても見通しを得ることができた。大工道具にせよ，左官道具にせよ，本博物館で展示される職人道具は，極めて専門性の高い特殊なものも多く，一般の来館者にはその使用法が理解できない可能性がある。道具の使い方の解説あるいは収蔵品の特徴や気仙大工の技術的特色と道具との関係といった，この気仙大工左官伝承館でしか展開できない展示が期待される。たとえば職人が実際

写真 9　意匠を凝らした母屋の戸袋

写真 10　付書院の繊細な組子細工

に道具を扱う写真やイラストを併記するといった，パネルやキャプションのデザイン面での工夫も考えられる。さらに，資料館の展示ホール，母屋，資料庫という多様な展示空間を有する点は，効果的な博物館展示として高い優位性をもつ。気仙大工の歴史や技術，気仙大工だからこその道具の価値，左官の道具，職人道具の解説といった，これら展示テーマ群を，より効果的に配置する展示方法も検討課題であろう。さらに，展示の切り口として，気仙大工の技術面にとどまらず，その生活史，あるいは道具からみた地域史，といった可能性もありえる。単なる職人道具の展示にとどまらない，多様な価値を有する収蔵品といえる。